

北海道農業研究センター稲育種グループの梶と申します。よろしく申し上げます。

ゆきさやかの育成経過についてですが、平成10年に交配を行ったものになる。片親が当時の札系97100、後に北海PL9という系統名になったものだが、こちらがアミロース含有率が適度に低いという特徴を導入した系統になる。こちらに対して、父親として中央農試岩見沢試験地で育成した品種にはなっていないが空育160号という耐冷性が強く食味も良い系統を人工交配を行った組み合わせに由来します。母親の北海PL9も耐冷性が非常に強く、この組み合わせは北海道向きの耐冷性の強い極良食味の品種育成を目標としている。低タンパクの系統、低アミロースの系統を意識的に選抜しながら、平成15年に北海302号というゆきさやかの前身の名前を名付け、北海道の奨励品種決定調査にも供試していただいた。食味や収量性・耐冷性については一定の評価はいただいたが、一部で葉鞘褐変が出る地域があり、北海道の認定品種ということ考えると、全道的に普及できる品種が望ましいということもあり、この系統が全道に広まるには相応しくないのではないかと、かなり有望度の高い状態で検討していただいたが、奨励品種にはなれなかった。しかし、極良食味、耐冷性が非常に強い、収量が安定しているということで、適地においては実力を十分発揮できると考え、平成22年度に品種登録の出願を行ったという経緯になる。その後の普及状況は、現在30ha程生産されている。

#### ◎ 一般社団法人北海道米麦改良協会 樋口 健一 技監より説明

北海道米麦改良協会の樋口です。よろしく申し上げます。

ゆきさやかは、粒形は長さは中、幅は中、形は半円ということで、ななつぼしに比べて長く、ほしのゆめに比べて幅も長さもやや大きい形状をしていると判断した。色沢はゆめぴりかのような極端な白濁は見られない。皮部の厚薄は他の品種と同程度。心白・腹白の発現の程度は供された試料をを見るとななつぼし・ほしのゆめと同程度。縦溝の深浅はやや浅いと記載してあるが、ほしのゆめの豊満なもの比べるとやや縦溝が見えるがそれ程目に付くものではない。胚の大小及び胚の形は他の品種と同程度で、特に大きいものではない。千粒重は試験結果をそのまま使わせていただいたが、22.5gと発表されていて、きらら397の22gとほぼ同じ、ななつぼし、ほしのゆめよりは粒重はやや重い。その他の特徴として北農研からもあったが、主要品種に比べると若干薄茶米の混入があると判断している。

司会は、「ゆきさやか」について出席者から意見を求めた。

司会：種子の供給について、教えていただきたい。作付け希望者がでたときにどうするか。

梶：平成27年産までについては、30haということもあり、積極的に種子販売をしているところはない。法人（市川農場やJA）と許諾契約を結び、元種を出し、そちらで種子を生産していただき、その種を栽培に使う。個人農家で試作をしてみたいという方には、その農家の地域の農協や普及センターの方にゆきさやかを栽培したい旨を申し出ていただき、葉鞘褐変の問題がある地域ではできないかもしれないが、そこをクリアした後にこちらへ申し出ていただければ、第三者への提供はしないとの念書がある上で供給してきている。今後面積が広がるようなことがあれば販売を専門に行うところがあれば、こちらから紹介していくことを考えている。